

表 6. 長期欠席・欠席がち・休学中の理由別学生数（学部/大学院別）

理由	経済的理由・ 家庭の事情*1	学業的理由*2	その他*3	無回答
学部	43 人 (0.3%)	92 人 (0.6%)	469 人 (3.1%)	161 人 (1.1%)
大学院	12 人 (0.4%)	16 人 (0.5%)	93 人 (3.1%)	6 人 (0.2%)
合計*4	55 人 (0.3%)	108 人 (0.6%)	562 人 (3.1%)	167 人 (0.9%)

*1 経済的理由、父母の看護、家業を継ぐ、結婚・出産・育児等。

*2 留学、進路変更、就職活動、研修、他大学受験、資格準備、飛び級等。

*3 身体疾患、精神疾患、病気のリハビリ中、ひきこもり、単位不足、単位をとる必要がない、アルバイトや趣味等。

*4 学部/大学院の別の不明であったものを除く対象学生全体に対する比率。

表 7. 長期欠席・欠席がち・休学中の理由が「その他」の学生の性別

男性	女性	合計
375 人 (68.6% [60.5%]*1)	172 人 (31.4% [39.5%])	547 人 (100%)

*1 ()内は単純比率、[]内は対象学生全体における男女差を補正した比率

表 8. 長期欠席・欠席がち・休学中の理由が「その他」の学生の学部/大学院・学年別分布

	学年	男性	女性	合計
学部	1 年	48 人 (3.3%)	25 人 (2.0%)	73 人 (2.7%)
	2 年	35 人 (3.3%)	20 人 (1.7%)	55 人 (2.5%)
	3 年	73 人 (3.1%)	46 人 (2.5%)	119 人 (2.8%)
	4 年	131 人 (4.6%)	58 人 (3.1%)	189 人 (4.0%)
	合計*1	287 人 (3.7%)	149 人 (2.4%)	436 人 (3.2%)
大学院	1 年	32 人 (4.3%)	3 人 (1.2%)	35 人 (3.5%)
	2 年	38 人 (4.4%)	10 人 (5.0%)	48 人 (4.5%)
	3 年	7 人 (6.6%)	5 人 (12.2%)	12 人 (8.2%)
	4 年	3 人 (7.0%)	1 人 (4.0%)	4 人 (5.9%)
	5 年	1 人 (5.0%)	1 人 (3.2%)	2 人 (3.9%)
	6 年	0 人 (0.0%)	0 人 (0.0%)	0 人 (0.0%)
	合計*1	81 人 (4.5%)	20 人 (3.6%)	101 人 (4.3%)
合計*2		368 人 (3.9%)	169 人 (2.5%)	537 人 (3.3%)

*欠損値は 10

*1 学年の別の不明であったものを除く対象学生全体に対する比率。

*3 学部/大学院の別の不明であったものを除く対象学生全体に対する比率。

表 9. 長期欠席・欠席がち・休学中の理由が「その他」の学生の欠席頻度

欠席頻度			
6ヶ月以上の連続欠席	122 人 (0.6%)		
3ヶ月以上、6ヶ月未満の連続欠席	103 人 (0.5%)		
欠席がち (必要とされる出席数の半分以上)	260 人 (1.3%)		
		休学期間	
休学	60 人 (0.3%)	6ヶ月未満	5 人 (0.03%)
		6ヶ月以上1年未満	30 人 (0.15%)
		1年以上2年未満	14 人 (0.07%)
		2年以上	7 人 (0.04%)
		不明	4 人 (0.02%)

*欠損値は 2

表 10. 長期欠席・欠席がち・休学中の理由が「その他」の学生の留年の有無・期間

留年の有無		留年期間	
あり	135 (0.7%)	1年未満	2 人 (0.01%)
		1年目	69 人 (0.35%)
		2年目	47 人 (0.24%)
		3年目	10 人 (0.05%)
		4年目	3 人 (0.02%)
		不明	4 人 (0.02%)
なし	336 (1.7%)		

*欠損値は 76

表 11. 長期欠席・欠席がち・休学中の理由が「その他」の学生の病気

病気	
身体疾患	15 人 (0.08%)
精神疾患	127 人 (0.65%)
病気・疾患はない	92 人 (0.47%)
わからない	188 人 (0.96%)

*欠損値は 125

表 12. 長期欠席・欠席がち・休学中の理由が「その他」の学生の居住状況

居住状況		
独居	227 人	(1.2%)
家族と同居	236 人	(1.2%)
わからない	71 人	(0.4%)

*欠損値は 13

表 13. 長期欠席・欠席がち・休学中の理由が「その他」の学生の外出状況

外出状況		
(おそらく) 外出していない	38 人	(0.2%)
(おそらく) あまり外出していない	131 人	(0.7%)
(おそらく) 外出している	244 人	(1.3%)
わからない	115 人	(0.6%)

*欠損値は 19

表 14. 長期欠席・欠席がち・休学中の理由が「その他」の学生の家族以外との人間関係

家族以外との人間関係		
(おそらく) 継続的にある	211 人	(1.1%)
(おそらく) あまりない	144 人	(0.7%)
(おそらく) ない	19 人	(0.1%)
わからない	151 人	(0.8%)

*欠損値は 22

表 15. 長期欠席・欠席がち・休学中の理由が「その他」の学生の中学・高校時代の不登校既往

中学・高校時代の不登校既往		
ある	27 人	(0.1%)
ない	134 人	(0.7%)
わからない	357 人	(1.8%)

*欠損値は 29

表 16. 不登校・アパシー・ひきこもりの学生数

不登校・ アパシー・ ひきこもり	狭義			3ヶ月以上			広義		
	男性	女性	全体	男性	女性	全体	男性	女性	全体
学部生									
不登校	80 人 (1.0%)	42 人 (0.6%)	122 人 (0.8%)	136 人 (1.6%)	66 人 (1.0%)	202 人 (1.4%)	278 人 (3.3%)	144 人 (2.2%)	422 人 (2.8%)
アパシー	12 人 (0.1%)	2 人 (0.0%)	14 人 (0.1%)	23 人 (0.3%)	6 人 (0.1%)	29 人 (0.2%)	81 人 (1.0%)	23 人 (0.3%)	104 人 (0.7%)
ひきこもり	33 人 (0.4%)	14 人 (0.2%)	47 人 (0.3%)	53 人 (0.6%)	25 人 (0.4%)	78 人 (0.5%)	90 人 (1.1%)	46 人 (0.7%)	136 人 (0.9%)
大学院生									
不登校	29 人 (1.3%)	6 人 (0.8%)	35 人 (1.2%)	43 人 (1.9%)	7 人 (0.9%)	50 人 (1.7%)	75 人 (3.4%)	17 人 (2.2%)	92 人 (3.1%)
アパシー	3 人 (0.1%)	2 人 (0.3%)	5 人 (0.2%)	6 人 (0.3%)	2 人 (0.3%)	8 人 (0.3%)	13 人 (0.6%)	5 人 (0.6%)	18 人 (0.6%)
ひきこもり	11 人 (0.5%)	0 人 (0.0%)	11 人 (0.4%)	17 人 (0.8%)	0 人 (0.0%)	17 人 (0.6%)	28 人 (1.3%)	2 人 (0.3%)	30 人 (1.0%)
全体*1									
不登校	110 人 (1.0%)	48 人 (0.6%)	158 人 (0.9%)	181 人 (1.7%)	73 人 (1.0%)	254 人 (1.4%)	355 人 (3.3%)	162 人 (2.1%)	517 人 (2.9%)
アパシー	16 人 (0.2%)	4 人 (0.1%)	20 人 (0.1%)	30 人 (0.3%)	8 人 (0.1%)	38 人 (0.2%)	95 人 (0.9%)	29 人 (0.4%)	124 人 (0.7%)
ひきこもり	44 人 (0.4%)	14 人 (0.2%)	58 人 (0.3%)	70 人 (0.7%)	25 人 (0.3%)	95 人 (0.5%)	118 人 (1.1%)	48 人 (0.6%)	166 人 (0.9%)

*1 比率は、学部/大学院の別の不明であったものを除く対象学生全体に対する比率。

表 17. 専門機関への相談

相談する/しない			
相談する	663 人 (62.3%[81.7%]*1)	相談場所	
		学内（学生相談室・保健センター等）	541 人 (50.8%)
		学外	5 人 (0.5%)
		記入なし	117 人 (11.0%)
相談しない	149 人 (14.0%[18.3%])	相談しない理由	
		相談機関がない	6 人 (0.6%)
		相談機関はあるが相談方法を知らない	29 人 (2.7%)
		相談機関があるか知らない	9 人 (0.8%)
		その他	61 人 (5.7%)
		記入なし	44 人 (4.1%)
無回答	253 人 (23.8%)		

()内は単純比率、[]内は回答のあった教員全体における比率

表 18. 学生への働きかけの積極性

積極性・頻度	
積極的に支援をしている (連絡以上の働きかけ)	104 人 (9.8% [17.4%])
機会があるたびに連絡を試みている	370 人 (34.7% [61.9%])
単位に関係する重要事項の連絡のみ	96 人 (9.0% [16.0%])
特に何もしていない	28 人 (2.6% [4.7%])
このような学生を担当したことがない	201 人 (18.9%)
無回答	266 人 (25.0%)

()内は単純比率、[]内は回答のあった教員 (「このような学生を担当したことがない」と答えたものを除く) 全体における比率

表 19. 保護者への連絡・連携

保護者との連絡・連携の有無	
あり	426 人 (40.0% [72.2%])
なし	164 人 (15.4% [27.8%])
無回答	475 人 (44.6%)

()内は単純比率、[]内は回答のあった教員全体における比率

表 20. 学生対応マニュアルの有無・必要性

マニュアルの有無			
あり	212 人 (19.9% [26.4%])		
なし	592 人 (55.6% [73.6%])	必要性	
		あるとよいと思う	361 人 (33.9% [87.4%])
		必要性を感じない	52 人 (4.9% [12.6%])
		無回答	179 人 (16.8%)
無回答	261 人 (24.5%)		

()内は単純比率、[]内は回答のあった教員全体における比率

表 21. 和歌山大学のひきこもり支援システム

支援の段階	支援の内容
Stage 1 (導入期)	訪問診断、メンタルサポーター (アミーゴ) 派遣
Stage 2 (治療期)	個人精神療法、薬物療法、家族療法
Stage 3 (仲間作り)	集団精神療法→自助グループ→奉仕活動
Stage 4 (社会参加)	就労支援

思春期ひきこもりと反社会的問題行動 — “ひきこもり” 概念の再検討 —

分担研究者 奥村雄介¹⁾

研究協力者 野村俊明²⁾ 吉永千恵子³⁾ 布施木誠⁴⁾ 千葉泰彦⁵⁾ 元永拓郎⁶⁾ 工藤剛⁷⁾ 月野木竜也⁸⁾
横野葉月⁹⁾ 高橋恵一⁶⁾ 鈴木圭⁶⁾

1)府中刑務所 2)日本医科大学 3)東京少年鑑別所 4)さいたま少年鑑別所 5)横浜少年鑑別所
6)帝京大学 7)秩父中央病院 8)千葉県警察少年センター 9)首都大学東京

研究要旨

本研究の目的は非行少年を対象に、ひきこもり傾向に着目し、非行類型、行為障害の有無および精神医学的診断、対人関係、家族状況などについて調べ、思春期ひきこもりと反社会的問題行動との関係を解明することである。今回の研究では少年非行とひきこもり傾向の関係の実態解明に迫るべく、“ひきこもり”概念について再検討し、“ひきこもり”を物理空間活動(Locomotion activity: 以下 LA と略す)と情報空間活動(Information activity: 以下 IA と略す)の二つの次元から分類した。さらに LA, IA を用いて少年非行の類型化を試みた。

A. 研究目的

<はじめに>

元来、非行少年は不登校と親和性が高く、“ひきこもり”とは親和性が低いと認識されていたが科学技術の発達や社会構造の複雑化によってその様相は変化している。高度経済成長とバブルの崩壊、人口増加、核家族化と少子化、受験競争の激化、高度情報化・管理化などにより、物や情報が氾濫する中で生活が忙しくなり、時間・空間的なゆとりがなくなっている。子どもたちの基本的な生活空間である家庭、学校、地域をみると、特に地域の許容量が減少する反面、家庭の許容量が増大した結果、学校に行かず、巷を徘徊する子どもが減り、家庭にひきこもる子どもが増えていったと思われる。つまり不登校の内訳は学校に行かず、地域に進出する“非ひきこもり”群と学校に行かず、家庭内から出ない“ひきこもり”群の二群に分かれ、後者が増加しているといえる。このような現象とあいまって従来は非行と

背反事象であった“ひきこもり”群から非行が散発するようになっていく。筆者らはこれを“少年非行の二極化^{1), 2)}”として提唱した。

本研究における“ひきこもり”の定義は端的に言えば行動範囲が家庭内に局限しており、その結果、社会的な人間関係が乏しくなっている状態であるが、時代とともに“ひきこもり”の質が変化していると考えられる。したがって思春期ひきこもりと反社会的問題行動について検討する際には“ひきこもり”概念について改めて考察する必要がある。

一般的に人間の活動は、物理空間における運動・移動と情報空間における送受信の二つの次元に分けることができる(表①)。仮に前者、後者をそれぞれ物理空間活動(Locomotion Activity; 以下 LA と略す)、情報空間活動(Information Activity; 以下 IA と略す)と命名する。従来の“ひきこもり”は LA, IA とともに低かったが、近年インターネット、携帯電話などの出現によって LA

が低くても必ずしも IA は低くない“ひきこもり”や、極端な例ではむしろ LA と IA が逆相関し、LA が低くかつ IA が高い場合があり得るようになった。すなわちコミュニケーションツールが乏しかった時代には LA と IA はパラレルであり、LA が低ければ結果として IA は低くなるという必然性があったが、現代では例えばネットサーフィンに耽溺した結果、長時間自室に閉じこもるようになり、IA が高ければ高いほど LA が低くなるという現象が生じるようになったのである。その一例として韓国では“ひきこもり”はネット依存の結果であると考えられている。またマスメディアをみるとテレビやラジオなど情報の流れが一方方向であったものがインターネットの出現によって双方向になり、コミュニケーションの様態がシフトし、人間の相互作用のあり方が大きく変化している。

この変化は特に、LA の低い“ひきこもり”群に多大な影響を及ぼしていると考えられる。この点に着目し、たとえばNHKは“ひきこもりネット相談”³⁾を始めている。さらに、このような LA と IA の乖離は本音と建前の二面性を助長し、たとえば裏サイトにおける陰湿なイジメや傍目からは動機が不可解ないわゆる“いきなり型非行”⁵⁾の温床になっていると考えられる。図①に“ひきこもり”の下位分類と非行との関連についての仮説を付記した。

＜研究目的＞本研究の目的は、非行少年を対象にひきこもり傾向について着目し、非行類型、行為障害の有無および精神医学的診断、家族状況、対人関係などについて調べ、思春期ひきこもりと反社会的問題行動との関係の実態解明に迫ることである。

B. 研究方法

平成 20 年 X 月 1 日から(X+2)月末までの 3 ヶ月間に少年鑑別所に入所した 14 歳から 20 歳の男女 386 名を対象に調査を行った。調査票は前

年度のパイロットスタディに使ったものを工夫・改善し、“ひきこもり”の実態を詳細に検討するために新たに情報活動レベル(Information activity level)などの項目を追加した。調査票は①フェイスシート、②本件非行、③非行・補導歴、④ひきこもり傾向、⑤精神医学的診断、⑥家族関係、⑦社会参加状況その他の 7 つカテゴリー、計 26 項目から構成されている。ちなみに調査票の記載はすべて鑑別技官が行った。調査対象は以下の男女である。

男子：336 名、平均年齢：16.6 歳

女子：50 名、平均年齢：16.9 歳

なお、プライバシー保護のため、個人が特定されないよう配慮している。

本研究では、反社会的行動(非行)と社会的ひきこもりを二次元平面に配して関係性を論じるため、先述した LA と IA の概念を採用した。

LA と IA が他者との関わり方の質的な差異を示すことから、調査項目の中で、それぞれの指標となる項目を次のように分類した。

LA (物理空間活動；直接的で、対面を伴う行動や人間関係に関する項目)：「非行・補導歴」、「非行集団所属」、「職歴」、「性体験」

IA (情報空間活動；間接的で、情報空間における自己表現や人間関係に関する項目)：

「ケータイ・パソコンによるインターネット利用状況」

C. 研究結果

1. ひきこもり傾向(low locomotion activity)

本研究の“ひきこもり”の定義は表②に示された通りである。この定義に「該当する(ほとんど自宅外に出ない)」者は男女 386 名のうち男子 4 名(約 1%)であり、「ある程度該当する(買い物や趣味活動、稀なまたは限定された対人接触のみ可能)」者は男子 3 名、女子 1 名であった。したがって“ひきこもり”の定義に該当するか、

またはある程度該当する者（以下；「ひきこもり傾向のある者」と呼ぶ）は約2%に過ぎず、希であると言える。ちなみに、「ひきこもり」の定義に「該当する」女子は皆無であり、「ある程度該当する」女子1名は高卒で不登校歴がなかった。女子のサンプル数が少なかったため、以降の統計分析は男子336名について行った。

ひきこもり傾向あり、なしの2群に分けて他の項目との関係を調べたところ、ひきこもり傾向のある者の方が、性体験が少ない傾向が見られた（グラフ①）。次にネット利用状況との関係を調べたところ、ひきこもり傾向のある者のネット利用率は低かった（グラフ②）。

2. 学歴2群（高卒以上、義務教育まで）比較

学歴を高卒以上と義務教育までの2群に分けたところ、前者の方が、知能指数が高く、両親がそろっており、家族関係もよく、経済的にも裕福であった。一方、後者の方では不登校歴、被虐待歴、非行・補導歴、非行集団所属の割合が高かった（グラフ③、④、⑤、⑥）。また前者の親の養育態度をみると普通または過干渉が多い傾向があるのに対し、後者では放任が多い傾向があった。非行類型をみると前者に風俗犯（わいせつ事犯および売春）が多い傾向がみられた。

3. 不登校経験の有無

ひきこもりと親和性が高く、前駆症状であることみなされうる不登校経験に着目し、その有無で2群に分けたうえで、非行に関する今回の調査で得られた他の項目との関係を調べた。

不登校経験のある者の方が学歴は低かった（グラフ③）。家族状況に関する3項目（家族形態、家族機能、家庭内暴力）で有意な差がみられ、不登校経験のある者の方が家族状況は恵まれていなかった。また不登校経験のある者の方が自傷の経験がある者が多く、知能指数は低かった（グラフ⑦、⑧、⑨）。

4. ネット利用状況（情報空間活動；Information

activity）

ネット利用状況を「双方向利用（他者との交流を目的として積極的に利用する）群」と、「単一方向的利用（ネット上の情報を閲覧するのみ）または利用なし、関心なし群」の2群（以下Active群とPassive群）に分けて他の項目との関係を調べたところ、Active群の方が、知能指数が高かった。また、Active群の方が非行・補導歴、非行集団所属、性体験、自傷歴など高LAを反映する項目に該当する頻度が高かった（グラフ⑩、⑪）。

5. 経済状況

経済的に貧しい家庭の方が被虐待歴や施設入所歴が多く、反対に裕福な家庭では両親が揃っている頻度が高かった（グラフ⑫、⑬）。

6. 親子関係

親子関係が不良な方が、不登校経験や非行・補導歴が多く、行為障害に該当する確率が高かった。また、被虐待歴、家庭内暴力、自傷歴、自殺企図についても同様であった（グラフ⑭、⑮、⑯）。

7. 嗜好

喫煙、飲酒のいずれか一方または両方をしている者を嗜好あり、いずれもしていない者を嗜好なしとして2群に分けたところ、前者の方が、活動性が高く、ネット使用状況、共犯関係、非行・補導歴、非行集団所属、薬物乱用、性体験の6項目で有意な差がみられた。また、前者の方が不登校経験の頻度が高く、学歴は低いけれども職歴のある者の割合が高かった（グラフ⑰、⑱、⑲）。後者はひきこもり傾向と相関していた（グラフ⑳）。

D. 考察

1. “ひきこもり”の分類と全般的傾向

報告者らは、本研究の“ひきこもり”の定義を再検討し、物理空間活動(LA)と情報空間活動(IA)の二つのパラメーターを導入した。このパラメーターを用いて四つの群に分けると“ひきこもり”群は（低LA、低IA）と（低LA、高IA）の二つに

該当する。この分類で見ると純系のひきこもりは（低 LA, 低 IA）に対応し、非行・犯罪とは対極にあると考えられる。特に女子の“ひきこもり”から非行・犯罪に至ることは極めて稀であると言える。一方、従来型の非行は高 LA に対応し、（高 LA, 高 IA）が能動的タイプ、（高 LA, 低 IA）が受動的タイプに該当している（図①）。

この枠組みに沿ってみると純系の“ひきこもり”と従来型非行の能動的タイプは論理学でいうところの対偶関係にある。したがって後者の特徴を分析することにより、翻って前者の特徴を推定することが可能であると考えられる。

LA と IA の関係についてみるとひきこもり傾向のある者はネット利用率が低かったことから、概ね LA と IA は相関していると考えられる。

まず物理空間活動の面からみると、性的活動は高 LA を反映する指標と考えられるが、本調査でもひきこもり傾向のある者は性体験が少なかった。一般に非行少年は性的に早熟であると言われているが、この結果もひきこもり傾向（低 LA）が非行・犯罪と相反することを示唆している。次に情報空間活動の面からみると、高 IA の方が知能指数が高いばかりでなく、非行・補導歴、非行集団所属、性体験など対人交流も盛んであった。その他、喫煙・飲酒の嗜好はネット使用状況、共犯関係、非行・補導歴、非行集団所属、薬物乱用の 6 項目と相関しており、高 IA および反社会的な高 LA と関連が深いことがうかがわれた。また喫煙・飲酒の嗜好のある者では性体験や職歴など社会経験を反映する LA も高かった。また喫煙・飲酒の嗜好のある者は不登校経験の頻度が高く、学歴は低かった。以上より、喫煙や飲酒は（高 LA 高 IA）を反映しており、非行・犯罪の initiator の一つであると考えられる。

2. 学校教育

不登校経験のある者の方が知能指数、学歴ともに低く、非行・補導歴や非行集団所属の割合が高かった。また行為障害に該当する割合が高かった。

さらに欠損家庭が多く、親子関係も不良であった。以上をまとめると非行少年は資質の面でハンディがあり、家族の援助も乏しく、早期に学校教育を脱離し、サブカルチャーと親和して反社会的な機能分化を遂げていると言っていることができる。

したがって、「不登校」は二つのタイプに分類することが可能であると考えられる。一つは、家庭環境が劣悪であって、学校をはじめとする社会生活にも反感や不満を持ち、拒絶するか、あるいは drop out して非行に走るタイプであり、もう一方は家庭環境がある程度整っていても何らかの原因により対人関係上の困難を克服できず学校不適応の状態に陥り、本研究の定義に該当する形での“ひきこもり”様の非社会的な状態像を示すタイプである。

3. 家庭環境

家庭環境を支える二つの柱は親子関係と経済状況である。まず親子関係については、不良な場合には不登校になったり、非行・補導されることが多くなり、行為障害に該当する確率が高くなる。また、被虐待歴、家庭内暴力などの暴力的コミュニケーションが盛んになり、自傷歴、自殺企図などの自己破壊傾向が出現する。次に経済状況についてみると、貧しい場合は欠損家庭の割合が多く、虐待されたり、施設に入れられたりすることが多くなっている。ちなみに家庭裁判所が少年院送致の適否を決定する際に非行性と要保護性の二つを検討するが、このような受け入れ環境の問題がなければ軽微な非行であれば社会内処遇となることが多い。

したがって不良な親子関係は“ひきこもり”を許容せず、非行を促進する要因の一つになっており、経済的にある程度恵まれていることは“ひきこもり”状態を長期間維持するための条件の一つになっていると考えられる。

4. 精神医学的診断

不登校でかつ“ひきこもり”がある群の中から発生する非行を考察する際に重要なのは第一に

行為障害の該当の有無である。大半は行為障害に該当しないが、“ひきこもり”の既往があって、その後、非行に及び少年鑑別所に入所した者の中には行為障害に該当する一群がある。“ひきこもり”の生活を送っていたために社会性が欠落し、未熟で免疫がないためにインターネットを通してまたは巷を徘徊するうちに容易に不良集団に感化されるという意味で、この一群を“ひきこもり先行型非行”と呼ぶことにする(図①)。この群の特徴は主体性がなく、依存的、意志薄弱で夜間徘徊、住居侵入、道交法違反、窃盗、薬物乱用などの軽犯罪が多く、しばしば虞犯として鑑別所に収容される。彼らの共通点の一つは、第二性徴により性的な欲動が亢進し、活動レベルが高く、家庭内での生活では飽き足らず、興味や関心が外の世界に向くといったメカニズムである。第二に行為障害以外の精神障害との関連について触れる。一般の非行少年(少年鑑別所入所者)の中でひきこもり傾向のある者の割合が約2%に過ぎないのに対し、医療少年院送致になった者の中でひきこもり傾向がある者の割合は約20%で10倍になっている。したがって精神障害、特に精神病性障害(統合失調症など)または発達障害が、“ひきこもり”の原因になっているとともに非行・犯罪の確率を高めている可能性があると考えられる。

5. 非行類型と“ひきこもり”の様態

本研究の結果から、“ひきこもり”の様態は(低LA, 低IA)と(低LA, 高IA)の二つに分けられることが示唆された。

(低LA, 低IA)タイプは無力型であり、基本的に非行・犯罪とは縁遠いと思われる。家庭内で起こる問題は軽微なものであれば事例化することはない。稀にみられるのは家庭内暴力の延長としての家族殺人や一家心中を企図する放火などであるが、背後に精神病性の障害や発達障害が隠れている場合がほとんどである。

これに対し(低LA, 高IA)タイプは能動性が高く、行動上や人格上の二面性を有している。この

タイプはネットを介した情報空間での逸脱行動、たとえばハッカー、コンピューターウイルスの散布、チェーンメールの発信、ネットいじめ、掲示板での犯行予告、裏サイトや2ちゃんねるをはじめとするコミュニティサイトの悪用(なりすまし、プライバシーの侵害、誹謗中傷)などに及ぶ可能性がある。彼らはコミュニケーションが偏っているため、隠れた攻撃性を秘めている場合には、“いきなり型非行”に及ぶ可能性も無視できないであろう。表③は理論的に予想される二つの犯罪類型である。

さらに従来、接点のなかった低LAと高LAの非行予備軍がネットを介して交流し、相互に影響し合っ非行・犯罪に至るケースにも留意する必要があるだろう。最近、新聞の紙面を賑わしている非行・犯罪、たとえばネットによる売春、非合法薬物の売買、強盗団の結成などをこれらの例として挙げることができる。

E. 結論

1. 本研究では物理空間活動(locomotion activity)と情報空間活動(information activity)の概念を用いて“ひきこもり”を下位分類し、非行との関連を調べた。従来型の非行は高LAに対応し、能動的タイプ(高LA, 高IA)と受動的タイプ(高LA, 低IA)に分かれた。一方、“ひきこもり”は低LAに対応するが、特に純系の“ひきこもり”である(低LA, 低IA)は非行・犯罪とは縁遠く、対極にあると考えられた。ただし、この“ひきこもり”状態が長期にわたり、持続する条件としてそれを許容する家庭環境(家族関係、経済状態など)の存在が示唆された。また、精神病性の障害は“ひきこもり”状態を促進する要因になっているとともに非行・犯罪の発生確率を高めている可能性があると考えられる。
- 2.
3. コミュニケーションツールのなかった時代、“ひきこもり”は専ら(低LA, 低IA)に対応

していたが、インターネットの出現により、第四の類型である(低 LA, 高 IA)タイプの“ひきこもり”がみられるようになった。この一群はネットを介した情報空間での逸脱行動、たとえばハッカー、コンピューターウイルスの散布、チェーンメールの発信、ネットいじめ、掲示板での犯行予告、裏サイトや2チャンネルの悪用などに及ぶ可能性がある。またバーチャルな世界に物足りなくなった一部の者が、通り魔殺人やストーカー犯罪などいわゆる“いきなり型非行”に及ぶ可能性も無視できない。さらに従来、接点のなかった低 LA と高 LA の非行予備軍がネットを介して交流し、相互に影響し合って非行・犯罪に至るケースにも留意する必要があるだろう。

なお、本研究においてはインターネットツールとして「携帯電話」と「パソコン」を区別せずに採用したが、近年の少年非行(少年の福祉犯罪被害を含む)の現状をみると、携帯電話の方がよりメジャーなゲートウェイツールとなっている可能性が高い。パソコンによるコミュニケーションと、携帯電話によるコミュニケーションには、目的や使い方の面で違いがあることから、それぞれのツールが非行とひきこもりに与える影響の質的な差異について、さらなる検討を重ねることが今後の課題である。

F. 研究発表

1. 論文発表

- ① 奥村雄介：行為障害の矯正治療。パーソナリティ障害、福島章編、111-139、日本評論社、東京、2008
- ② 奥村雄介：医療少年院で「叱る」ということ、こころの科学 142、臨床現場に学ぶ叱り方、48-53、日本評論社、東京、2008
- ③ 奥村雄介：非行少年への治療的介入～医療少年院における治療・教育の紹介～、心と社会 134、39 巻、4 号、特集 司法精神医学の展開、連載 反社会的行動への挑戦、68-72、

日本精神衛生会、2008

- ④ 奥村雄介：行為障害・非行。臨床精神医学、第 36 巻、第 5 号、特集 児童思春期精神医学の最近の進歩、第 2 章 子どものこころの障害、611-616、2007
- ⑤ 野村俊明・奥村雄介：非行と犯罪の精神科臨床—矯正施設の実践から—、星和書店、東京、2007
- ⑥ 奥村雄介：非行と自己破壊行動。母子保健情報 55 号、特集 子どもの心Ⅱ、54-58、2007
- ⑦ 奥村雄介：その他—非行・犯罪にみる衝動性。精神看護エクスペール第 20 巻、衝動性と精神看護、118-125、中山書店、2007

2. 学会発表など

- ①奥村雄介：重大・粗暴犯罪少年の精神、行動及び身体面の特徴と有効な処遇方法。国連アジア極東犯罪防止研修所講演、2008
奥村雄介：医療観察法をめぐる問題。第 54 回日本矯正医学会シンポジウム、2007.
- ②奥村雄介：青年期の反社会的問題行動。第 28 回全国メンタルヘルス研究会、教育講演、2007
- ③奥村雄介：少年非行と自己破壊の行動。東京家庭裁判所研究会講演、2007.

F. 文 献

- 1)奥村雄介：最近の少年非行の動向と特質—医療少年院の現場から—、犯罪学雑誌(67)3、101-104、2001
- 2)奥村雄介他：思春期ひきこもりと反社会的問題行動—少年非行の二極化—。思春ひきこもりをもたらし精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究、斉藤万比古(主任研究者)；厚生労働科学研究費補助金、こころの健康科学事業、総括・分担研究報告書、2007
- 3)倉本英彦：NHKひきこもりネット相談の実際。精神科治療学(23)5；543-547、2008
- 4)奥村雄介：凶悪な少年非行—いわゆる「いきなり型非行」について。犯罪に挑む心理学—現場が

語る最前線一，笠井達夫編；98-109，北大路書
房，京都，2002

医学 33(4)；391-395，2004

5)奥村雄介：悪性ひきこもりの現在，臨床精神

表1 Locomotion Activity & Information Activity

	活動領域	活動内容
Locomotion activity (LA)	物理空間	運動・移動
Information activity (IA)	情報空間	送信・受信

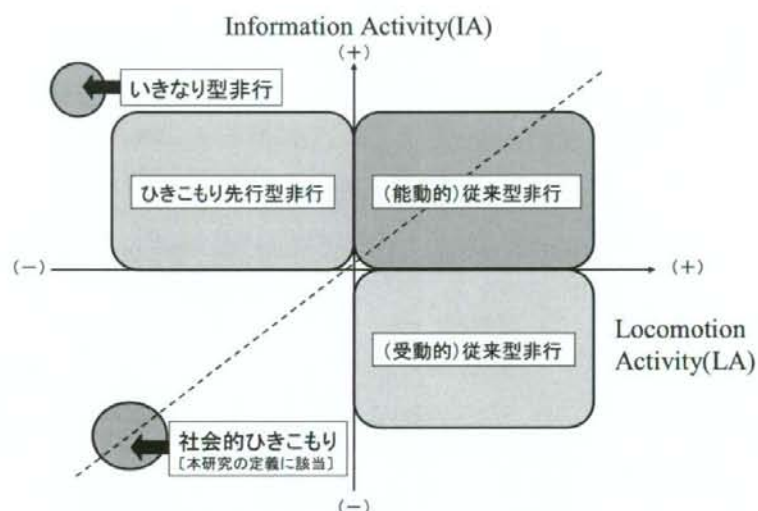
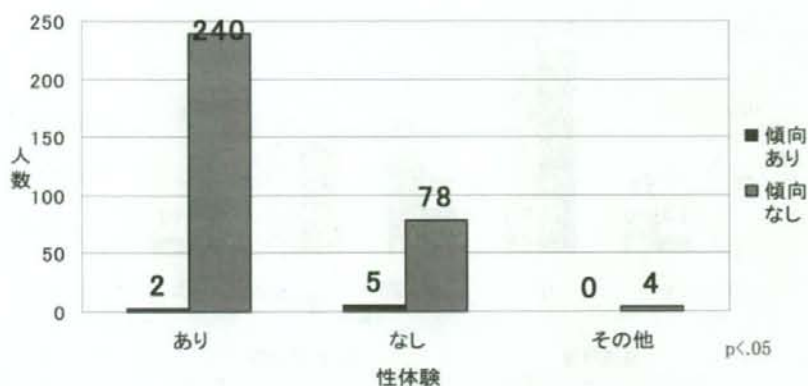


図1 ひきこもり下位分類と非行との関連仮説

表2 本研究の「ひきこもり」の定義

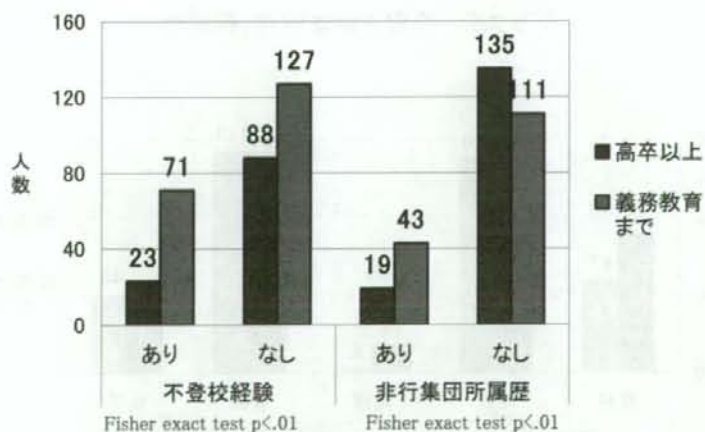
様々な要因の結果として社会参加(義務教育を含む就学・家庭外での交友など)を回避し、原則的に6ヶ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態(他者と交じわらない形での外出をしてもよい)を指す現象概念であり、30歳までに発症するものである。



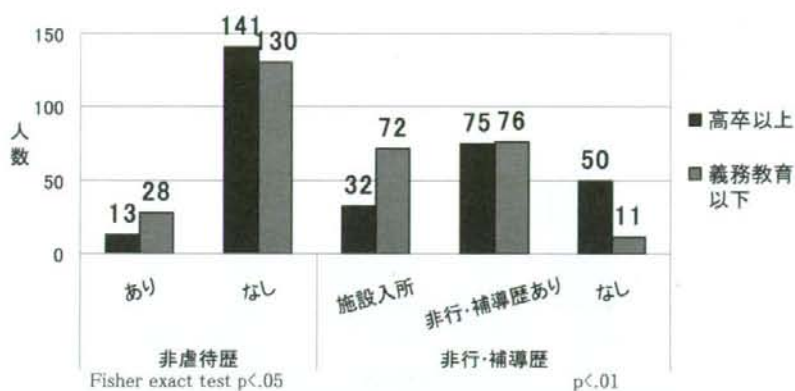
グラフ① ひきこもり傾向と性体験



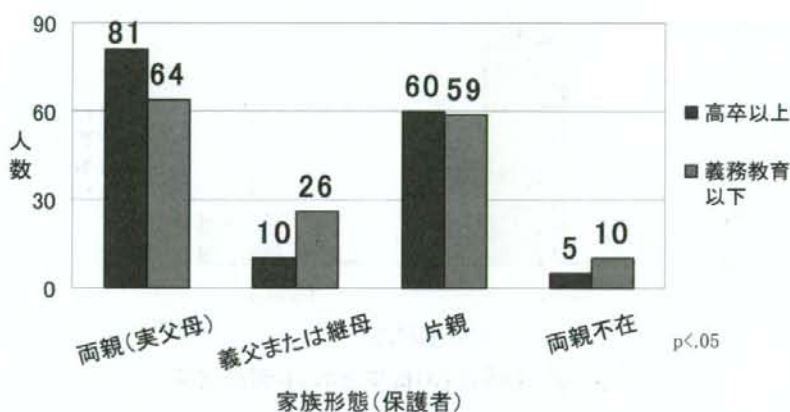
グラフ② ひきこもり傾向とネット利用状況



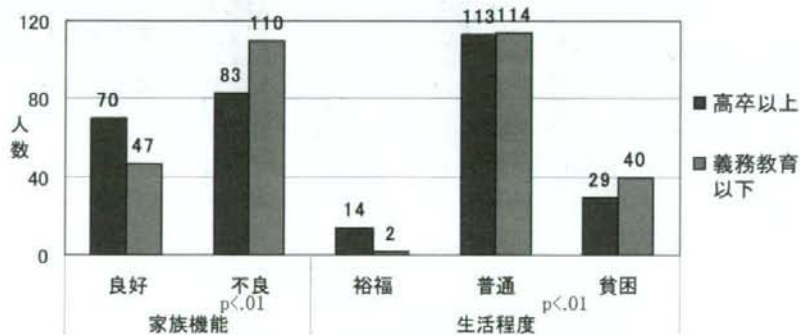
グラフ③ 学歴と不登校経験、非行集団所属歴



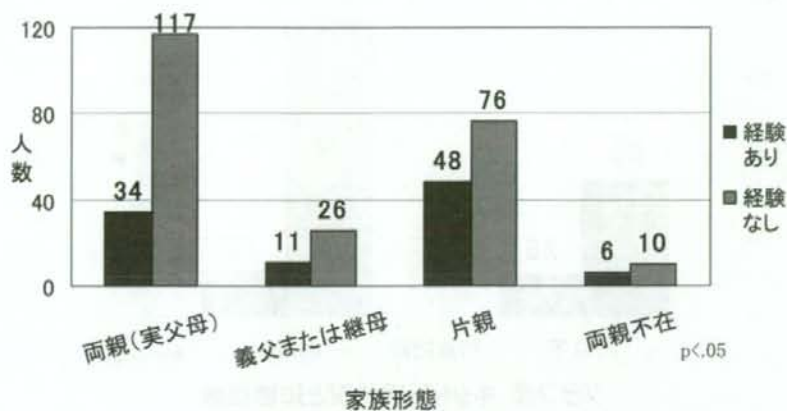
グラフ④ 学歴と被虐待歴および非行・補導歴



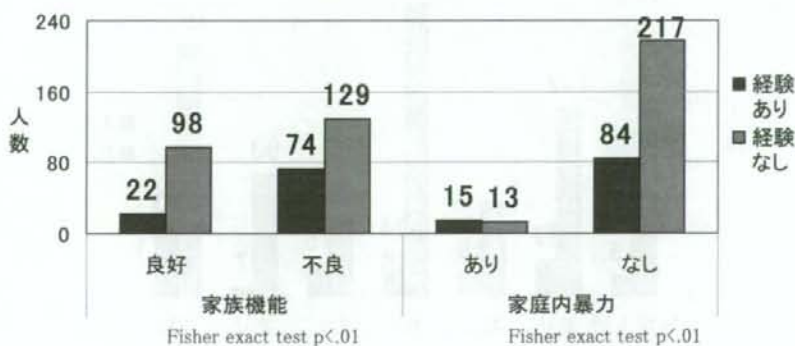
グラフ⑤ 学歴と家族形態(保護者)



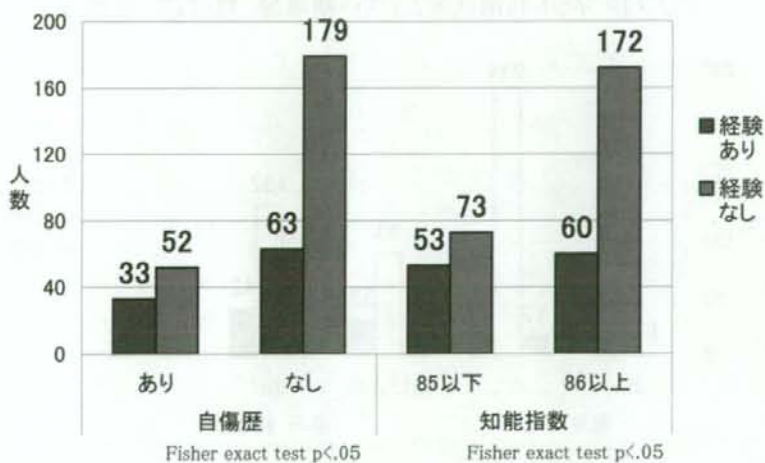
グラフ⑥ 学歴と家族機能および生活程度



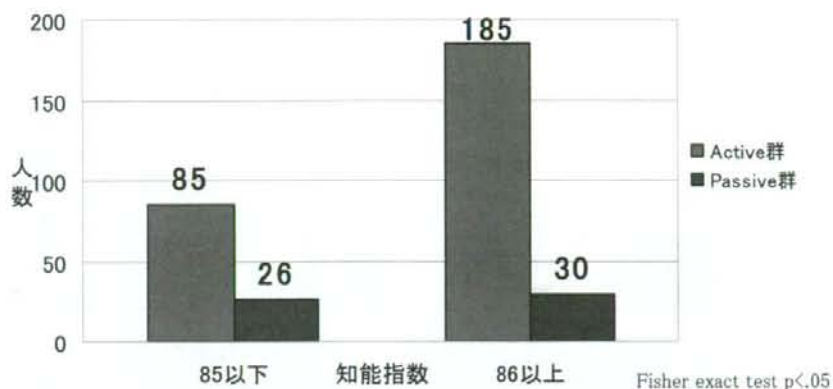
グラフ⑦ 不登校経験と家族形態



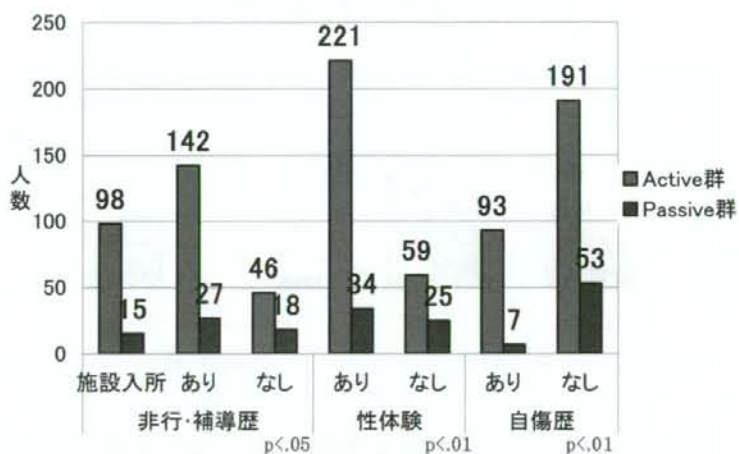
グラフ⑧ 不登校経験と家族機能および家庭内暴力



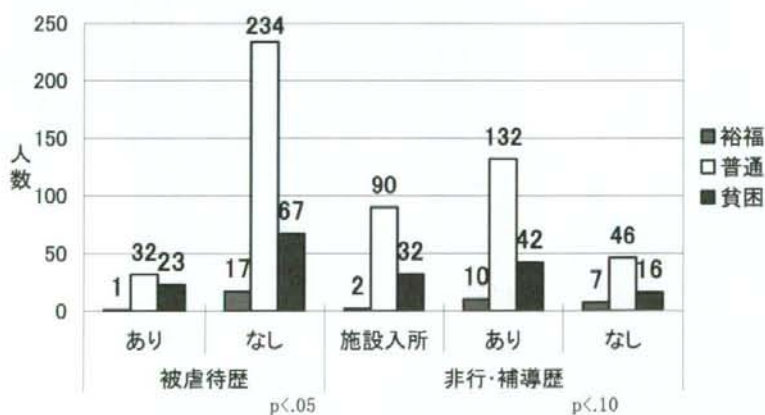
グラフ⑨ 不登校経験と自傷および知能指数



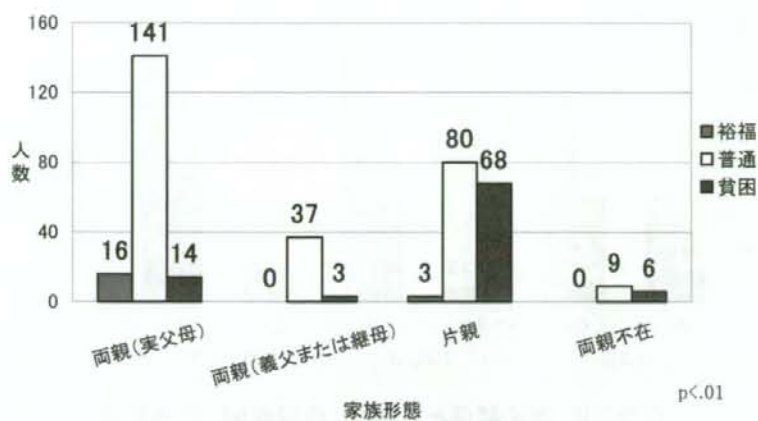
グラフ⑩ ネット利用状況と知能指数



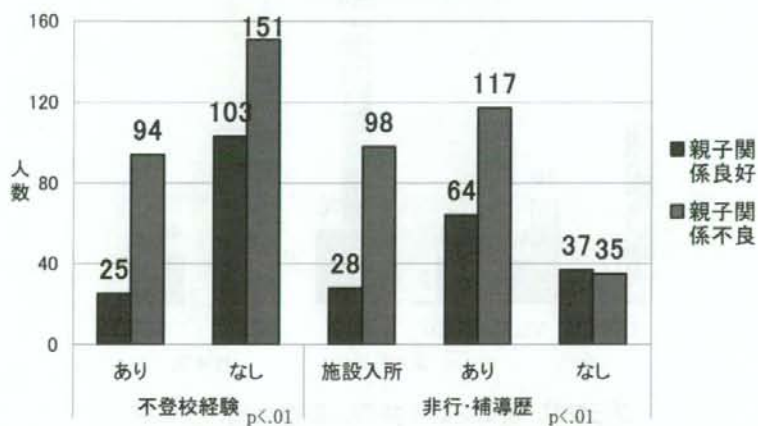
グラフ⑪ ネット利用状況と非行・補導歴, 性体験, 自傷歴



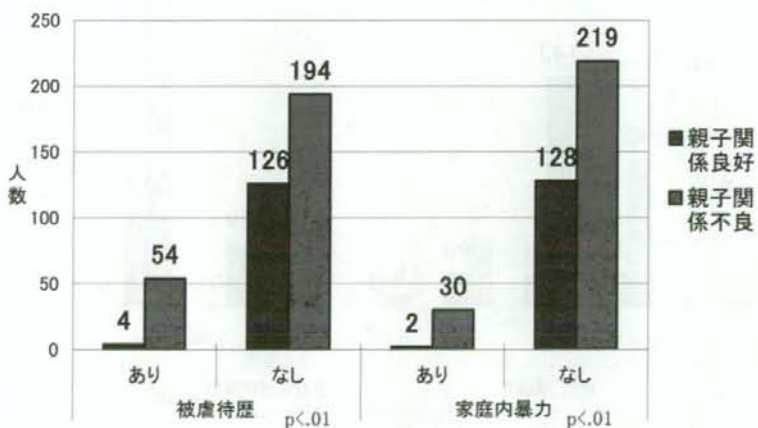
グラフ⑫ 経済状況と被虐待歴, 非行・補導歴



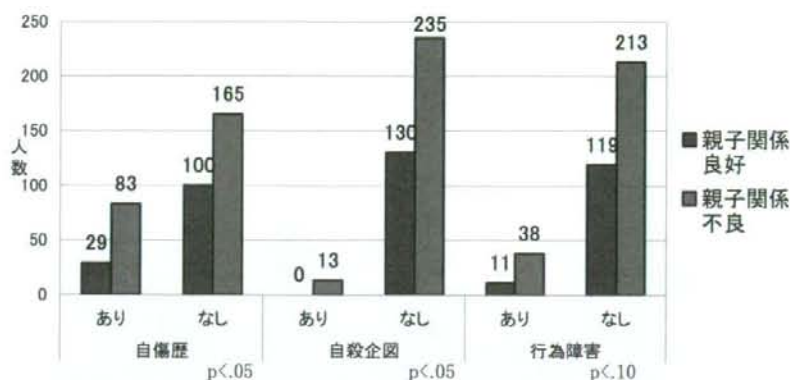
グラフ⑬ 経済状況と家族形態



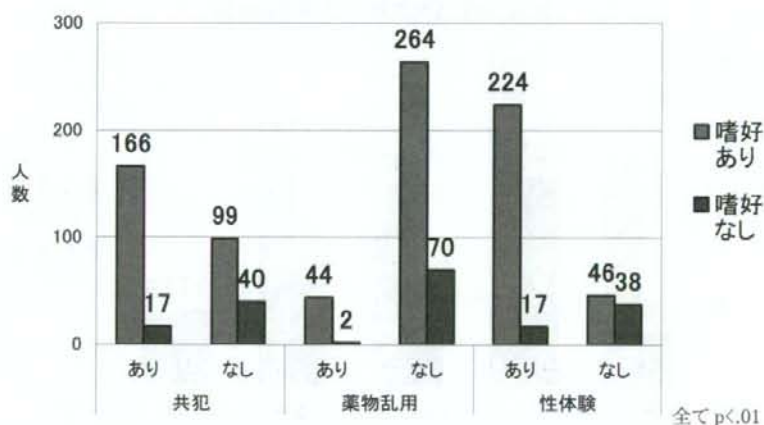
グラフ⑭ 親子関係と不登校経験, 非行・補導歴



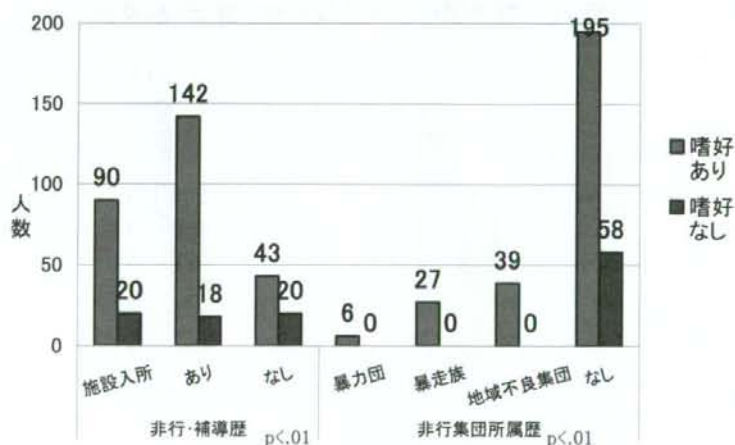
グラフ⑮ 親子関係と被虐待歴, 家庭内暴力



グラフ⑯ 親子関係と自傷歴, 自殺企図, 行為障害



グラフ⑰ 嗜好2群と共犯, 薬物乱用, 性体験



グラフ⑱ 嗜好2群と非行・補導歴, 非行集団所属